

知のコラボレーション～主題別Bの魅力～

日 時：2013年10月17日(木) 18時30分～20時30分

場 所：立教大学池袋キャンパス 太刀川記念館3階 多目的ホール

◆概要説明：

中島 俊克 本学経済学部教授
全学共通カリキュラム運営センター
総合教育科目構想・運営チームリーダー

◆事例報告：

村上 和夫 本学観光学部教授
細井 尚子 本学異文化コミュニケーション学部教授
安松 幹展 本学コミュニティ福祉学部教授
全学共通カリキュラム運営センター
総合教育科目構想・運営チームメンバー

◆コメンテーター：

佐々木 一也 本学文学部教授

◆司会：

小泉 哲夫 本学理学部教授
全学共通カリキュラム運営センター
総合教育科目構想・運営チームメンバー

○小泉 皆さん、本日はお忙しい中、お集まりいただきまして、ありがとうございます。2013年度の全カリシンポジウム「知のコラボレーション：主題別Bの魅力」ということで、本日のシンポジウムを始めさせていただきたいと思います。私、本日の司会を務めさせていただきます理学部の小泉です。よろしく願いいたします。

では、早速、全カリ部長の青木先生から挨拶をいただきたいと思ひます。

○青木 全カリ部長の青木でございます。お集まりいただきまして、ありがとうございます。全カリでは、毎年秋に、十数年前に始まってから1回も欠けることなく、大学教育に関わるシ

ンポジウムを開いております。ときに、あまり全カリには直接的につながっていないような、もっと大きなタイトルを掲げ、しかし、中身を議論していくと全カリの問題に至るというケースと、今回は、それとは反対に、全カリが用意している主題別Bという科目群、それに焦点を当てています。おそらくシンポジウムの中で、そもそも大学教育とはどういうものでなければならぬのかというような話に広がっていくことだろうと思っております。ぜひ本日も有益な議論ができればと思っております。よろしく願いいたします。

○小泉 では、早速、議論に入りました。

いと思います。まず初めに本日のテーマであります主題別Bですね。以前は「総合B」とっていたものなのですが、もうスタートしてから15年経っていると思います。その辺りの経緯説明や昔と理念が少し変わってきているところもありますので、全カリの総合チームリーダーである中島先生からまずは説明をしていただきたいと思います。よろしくお願いたします。

○中島 中島でございます。私が3つの事例に先立ちます概要説明ということで、総合B、主題別Bというのは本来どういいうもので、どのようにやってきて、そのうちにどういう問題が生じて、それをどのように解決しようと思っているかということをお10分程度でお話ししたいと思います。

昨年度から、若干の編成替えに伴いまして、名前も主題別Bと変わり、科目定義もややペダンティックな表現になってはおりますが、基本的に科目の理念などは変わっておりません。要約いたしますと、この理念というのは、3コマ分の資源を投入して、学際的な教育をプロモートするということがあります。これは、全カリ総合そのものの理念を一番集約的に表現する科目であると思っております。同じ1つの問題をめぐって複数の専門分野からの考えが提供されることで、複数の見方を1つの科目の中で総合しようとする。また、専門分野が異なる複数の担当者がコーディネーターを中心に緊密に協力し合いながら授業を進めていく。そして、履修者からの発言も歓迎するという授業を通し、学生の柔軟な知性の発達を促すことを目指しております。これを運営している教員にとりましても、そのような授業を展開することによって知見を広め、人脈を広げ、あるいは授業の交流といった刺激も受けるという、意味のあるものとして構想さ

れたのでございます。

履修者数の状況を申しますと、各科目平均で150~160名ぐらいの人数を集めており、立教に在席する学生の少なくとも約半分は何らかの形でこの科目に触れて卒業していくということになります。

さて、この主題別Bは初めのころは学部提案や全カリの教育研究室が提案した科目が多かったのですが、だんだんと学部等からの提案が減ってきて、いわゆる学内部局提供のものが増えてきています。こういったことから、部局への依存が増して、教員の熱度がだんだん下がってきているのではないかと考えております。やはりこれが現在の主題別Bが直面している大きな課題です。この制度が発足した当時は、制度改革について学内で議論しておりましたので、一般教育部をなくす代わりにこういう科目をつくろうということで、教員の熱度も高く、少なくともこういうものがあるということはみんな知っているという状況でした。しかし、だんだんとこの科目が当たり前になってくると、新任の方々にはしっかりと説明がなく、総合B(主題別B)とは何か全然見当もつかないというような教員が、例えば経済学部などでいますと、半分ぐらいを占めてしまっているのではないかとというような事態になってきています。私は、これも大きな問題だと



小泉 哲夫

思っております。教員の積極的参加が減っていること、また制度自体を知らない教職員が増えているという問題を解決するためにも、2012年度より「2年ルール」というものを導



中島 俊克

入いたしました。これはシンポジウムの最後のディスカッションのところでも話題にするつもりです。科目のマンネリ化を防ぐために同一の企画の提案は2年までというルールです。この科目のスタートが学際的なフレッシュな教育をプロモートするということですから、そこを大事にしてほしいと考えているのです。そんなに2年に一度企画するのだったら、もうやめたいというところもなくはなかったと思いますが、幸いにして2013年度も激減という事態は回避できました。しかし、実際のところは、若干看板を塗り替えて来年度も同じことをやろうと考えているところもあり、この2年ルールを導入いたしましたけれども、一番初めの理念に立ち返り、そして科目の存在意義というものを学内スタッフに周知してもらい、そのさらなる工夫が必要であると考えているのであります。

色々ネガティブな面を申し上げましたが、幸いにして実際にやっていた先生、多くの関係者の方々はこの科目の理念に共鳴し、熱意を持って取り組んでいただいています。ぜひここで個々の先生方にそういうことを

披露していただいた上で、もう一度この最初の理念に立ち返ってこの科目について議論してみたいということで、このシンポジウムを企画いたしました。

以上をもって一応概要説明といたしまして、早速お話を伺いたいと思えます。

〈事例報告①〉

主題別B

【前期】ラグジュアリービジネスの世界

【後期】観光におけるアセットマネジメント

池袋・新座キャンパス遠隔共同講義
観光学部 村上和夫

○小泉 今回3つの事例報告を話題提供として用意いたしました。早速、観光学部の村上和夫先生にお話していただきます。前期は「ラグジュアリービジネスの世界」、後期は「観光におけるアセットマネジメント」というタイトルで2013年度の主題別Bをやっています。特にその中でも、新座と池袋で同時に開講する遠隔共同講義という仕組みを取り入れているようなので、その辺りの考え方や学生の反応などをお聞きしたいと思います。よろしく願いいたします。

○村上 観光学部の村上でございます。この科目は、私ども観光学部の庄司貴行先生が実は責任者なのです。ところが、庄司先生はこの時間に授業があるため、共同で担当している私がお話させていただきたいと思えます。

「ラグジュアリービジネスの世界」、「観光におけるアセットマネジメント」という科目は、10年前ですと、こんなものが授業になるのかという話があったかもしれませんが。ラグジュアリーの商品を買うなんていうのは



村上 和夫

個人の趣味であって、そんなものは勉強するものではないというような話があったかもしれませんが。しかし、今や我々の領域では非常に重要なものです。

まず初めに、この授業の運営上の特徴について幾つかお話しして、次に背景についてお話しいたします。この授業は、全学部の学生の皆さんを対象に、さらに言うならば全学部の先生方も対象に企画することで、立教の中でラグジュアリーブランドビジネスや、あるいは、アセットマネジメントということを広めたいというのが狙いなのです。

さらに、全学共通カリキュラムは、比較的低学年の学生が多く履修します。ところが、このふたつの授業は、内容的に低学年の学生には少し分かりづらい。むしろ2年生、3年生になったときに、なるほどこれは世の中で重要なものだと分かるような内容になっております。例えば授業中に、「ある投資会社がホテルを200億円で買ったものが700億円で売れたんだよね」というのを僕たちは平然と言いますが、1年生の学生には何が700億円なのか、700億円とはどういう価値なのか、実感はないようでした。しかし、「あなたたちが知っているあのホテルのことですよ」と言うと、ホテルの売買が行われる話だということが具体的にイメージできるようになります。なおか

つ、ホテルの売買が行われるということは、病院も売買され、場合によっては学校法人も売買される話であって、その応用範囲が広いものであります。ですので、伝え方の工夫をすることで全学部、全学年、そして比較的高学年の学生も楽しみながら学べるものになっています。

この授業では可能な限り多くのゲスト・スピーカーを招へいし、新しい領域を学内に伝えたいという考えがあります。そのため、学際的ということもさることながら、多くの実務家の方に来ていただいて領域全体について細かく語っていただきました。その上で、ゲスト・スピーカーの話をもとに我々教員がその現場の抽象化を試みて、学生に大学で学ぶことの取りかかりを説明していくよう進めています。

池袋キャンパスと新座キャンパスを特別なLANで結んで授業を行います。すべての学部キャンパス間の隔たりなく授業を提供するという理念から、我々は2つのキャンパスで同時開講というやり方を選んでおります。以前、開講していた「仕事と人生」という科目は、その当時キャンパス間をで結ばませんでしたので、池袋キャンパスの先生と新座キャンパスの先生がそれぞれ別々にやっておりました。しかし、これはもう今のインターネットの仕組みで乗り越えられるようになりましたので、同じ授業を両方のキャンパス同時にすべての学生がとれるという形になっています。

これを開講するにあたり、我々は授業の運営についていろいろと考えました。とくに教室の中の倫理やマナーを統一したいということがありました。先生方がお見えになって話しているときに私語をしないとか、教室は扉を閉まるとそれ以降は入れないなど、我々から見るとごく当たり前のことかもし

れませんが、そういったことをきちんと徹底し、それを学生がみずから守るという方式をとっています。新座キャンパスもそうですが、池袋もほとんど私語がありません。とても静かにこの授業が運営されており、これは我々が少しびっくりするぐらいです。それから、評価は達成度を確認する試験ではなく、レポートでやっておりまして、これが大変つらいのですが、レポートで理解度と応用能力の確認と評価をするというやり方をしております。

次に、この授業の背景についてまず皆様にご説明をしたいと思います。ここからは少し観光学部的ですが、実は今、世界の旅行需要というのは飛躍的に伸びております。しかし、日本というのは今逆に、旅行をしない人たちの集まりになっておりまして、特に若い人たちの旅行の参加率というのは、徐々に落ちている状態になっています。そのため、我々の感覚として旅行の需要が世界的に大きくなっていくという印象はないのですが、実は去年、世界の旅行人口は10億人を超え、それが2030年、今の学生がちょうど中年の真っただ中、もう初老にかかるというときには、今よりも30%も40%も増加することが予測されているのです。我々は日本という国の中にいるため、旅行というものについてそれが先端的だという感覚はないのですが、我々が扉を開けた瞬間に、洪水の流れが入ってくるように、実は世界中から旅行者がやって来るという状態が起こります。これに対して、国は政策を打とうとしているのですが、観光学部だけではとてもこの状況に対応する人材を育成することはできません。それゆえ、飛躍的に伸びていくこの旅行に対して全学的に取り組む条件を伴っていくことを考えています。この科目を開講することになった背景にはこの旅行需要

の拡大があります。

我々は観光研究所というところを母体にこの科目を提案しているのですが、それに対して観光学部とビジネスデザイン研究科が教員を出し、それぞれのテーマについてどういう切り口があるかということを取業では取り上げています。そして、全学の学生がこの科目に関わることによって、ほかの学部教育の中に、例えばゼミでテーマとして取り上げてもらうとか、あるいは大学院でその研究をしてもらうとか、そして研究所がこれに関わってもらうなどの関係ができあがってくるということを大きく期待しています。そのために、このコマを全学部の学生が履修できる全カリに置くことになったわけです。

まだ少し観光の話が続けていきますと、実は日本の観光というのはグローバルスタンダードにまだまだ遠いところがあります。これからはグローバルスタンダードに対応して、供給を増加させて投資機会を確保するということが、大きな課題となるのです。しかしこれは、観光学部だけの課題ではありません。例えば、商業だと経済学部が関係し、そのほかのホスピタリティーのマネジメントの部分だと経営学部が関係しています。あるいは、旅行者の救援、救護というところではコミュニティ福祉学部が関係するかもしれません。そういう意味では、このグローバルスタンダードをつくっていくというところは、観光学部だけではとてもまかないきれないものなのです。

一方、皆様ご存じかもしれませんが、旅行というのは価格が安いことが正しいと世の中の人たちは考えています。これは実はほんでもない話なのですが、特にインターネットビジネスが出てくるようになり、低価格化の圧力がますます非常に強かかってきてい

ます。ただ、よいものを高く売る、どうやったら質が高く品位も高いサービスを高級なものとして人々に提供できるかは、我々の努力にかかっているのです。そういう意味で、伝統の日本文化というのは世界に示そうとしているのですが、それは必ずしもグローバルな形にはなっていないので高く売れないのです。ですので、この高品質化と高品位化というのは我々の中で非常に重要な課題です。しかしこれも観光学部だけでは限界があって、当然、文学部のお力を借りなければいけないということになってくるでしょう。

そういう意味では、これから扉を開ければ外国人がどんどん来るというときに、日本の観光産業の現状に対して観光学部だけでは課題を解決することができないので、すべての学部の人々がこれに関係があることを意識していただき、例えば、経済学部でもゼミで取り上げることがあり、文学部でもそのテーマで卒論を書く人がいるというように、全学的に取り組めるものに仕上げていくことが我々の希望であります。

2つの科目はどうなっているかというと、1つは、「ラグジュアリービジネスの世界」を前期に開講したのですが、高品位化について、すでに雑貨を通じてそれを達成しているラグジュアリービジネスからそのビジネスモデルを学ぶ。それから、後期は投資ということを通じていろいろなものの売買をしているアセットマネジメントからグローバル化の方法を学ぶということになっています。例えば、池袋側からの授業でホテル売買の話がされると、新座は観光学部とコミュニティ福祉学部と現代心理学部がありますが、コミュニティ福祉学部の学生などは、関係ないことだと思いがちなのです。しかし、例えば、質問をして、「どうい

ものに今の投資のアセットマネジメントは効くのですか」と聞くと、病院がアセットマネジメントで売買されますよというような話が出てきて、コミュニティ福祉学部の人たちも自分たちが関わっているところのサービスが売買されることに気づいてくるわけであり、そして、公的なものが果たして福祉をつくるということが本当に可能なのかという疑問がわいてきます。このように、この2つの科目を最初のスタートとして、違うテーマに幅広く発展していただろうと考えています。

さて、これはほかの科目との関係、あるいは教育との関係で見ると、我々は実業界の方に最初に観光研究所のかなりレベルの高い研究会に来ていただきました。この研究会に来ていただいたメンバーを今年度主題別Bでゲスト・スピーカーに迎えています。同時に、全員ではありませんが、この方々が観光学部やビジネスデザイン研究科にゲスト講師として登場するという仕組みになっています。

産業界の方と連携するための研究会をつくり、まずこちらに対する魅力をきちんと作りだして、その中から大学で教えてもよいという人を探し出し授業をつくるという仕組みになっています。

どういう方に担当していただいているか、どうやってこの人たちを探し出したかというのは別の機会にお話をしたいと思います。例えばラグジュアリーの方では、明治大学の客員教授をしております斎藤和弘さん。この方はVOGUE JAPANの社長をしていた方です。彼は原宿、表参道、神宮前でFNO (FASHION'S NIGHT OUT) という大きなイベントがございいますが、その出発をつくった方です。

今お話したことをまとめますと、

最初はこの研究会をつくり、相互に利益共有する。そして、そこから教育プログラムをつくっていくという流れです。

では、具体的な授業の様子です。池袋で話している方がいて、その方のスライドが新座の教室に映るというふうになっています。授業は後期ですと池袋100名、新座50名程度の学生が履修しています。僕が新座側でマネジメントしているのですが、私から池袋の教室が見えるようになっていきます。そして、メディアセンターの人がその授業をインターネット上でマネジメントしています。

そして課題なのですが、この授業は、それを通じて新しい研究対象、教育対象を社会から立教大学の中に持ち込むということがございます。ですから、当然、教科書の編纂というのが必要であります。今この研究会から始めれば2年目が終わろうとしているところで、大学から一部補助金をいただきまして、今教科書の編纂をしています。それから、我々がもう一回、研究会を通じてどうやって社会にこの成果を還元できるかという課題がありまして、今年は少しレベルの高い細かい研究会をつくっており、だいたいそれぞれの業界の方から毎回50人ぐらい集まってください。

それから、これはまだやっていないのですが、いろいろな学部の学生たちが授業の中でどうやって交流できるのかということ、これを通じて彼らがお互いに知恵を出し合いながら、この領域にどうやって関わっていくかを探ることが、実はすごく重要です。

また、この授業に来てくださっている方のすべてではありませんが、コアメンバーは、一環連携教育の仲間たちなのです。つまり、立教にとって強いビジネス分野なのです。そのところ



はまだこの中にはあらわれてはいませんが、言ってみればキャリア教育のような部分もありまして、先輩たちがこうやってこの分野をつくっていったのだということを、やがて学生がきちんと理解してくれるようになると思います。

すみません、長くなってしまったかもしれません。

○小泉 ありがとうございます。パネルディスカッションの後に質問時間を取りたいと思います。

〈事例報告②〉

知のコラボレーション～主題別Bの魅力～
異文化コミュニケーション学部
細井 尚子

○小泉 では、2番目の事例といたしまして、長年、総合B、主題別Bに関わってこれました異文化コミュニケーション学部の細井尚子先生にお願いしたいと思います。

○細井 よろしくお願いたします。今、ご紹介いただきましたが、私は2000年度に立教大学に着任しまして、2001年度から長く担当し続けており、この枠が大好きです。先ほど既にご紹介がありましたけれども、やはりこの枠というのは複数の講師ができるということが一番の魅力だと思います。



細井 尚子

私の場合は専門が演劇学で、私自身はテーマに合わせていろいろな周辺分野の方々と協力してやっていくという形で研究を進めています。したがって、この主題別Bでも必ず現場

の人には入ってもらい、私たちの研究とうまく掛け合わせる形でやっています。それから、履修者は全学部と全学年にまたがりますので、実際に話をしているもの、取り上げているもの知らない学生もおります。そういう学生にも分かるように映像や実習を必ず組み入れます。自分がそのときにやっている研究プロジェクトの還元であったり、あるいは、この授業から研究プロジェクトが立ってきたりといったようなことで、研究と教育の往還をさせています。

私の場合は授業を集中開講方式でやらせていただいております。2001年度から2005年度までは1限から4限まで集中で4回という形でやりました。その後の「『見ため』の力」も「舞台は楽し」も同じ形でやりました。ただ、実は土曜日の1、2限は学部によっては1年生の必修英語が入っているということなので、その後少しずつずれてきて、今年度から土曜日の3限から5限で5回という形になりました。集中開講方式だからこそできていることもたくさんあります。この形をつくりあげたのは、最初にやらせていただきました

「日中サブカルチャーの伝統と現代」ですので、まず例としてこちらを紹介したいと思います。これは5年間開講していますが、毎回タイトルを変えてやっていました。どれぐらいの担当者に入っていただくとかちょうどいいバランスになるのかということを毎年少しずつ操作しながらやってきました。2003年度は「観客論」、2004年度は「伝承」というテーマで行いました。2005年度で終わりました、毎回の講師はやはり3名が一番理想的だということが分かりました。また私の場合、5回とか4回の集中でやっていたので、できれば毎回必ず現場の人が入っていたほうが良いということもわかりました。そうしないと、複数講師で話し合っても理論的なことに偏ってしまい、どうしても現場の生の声が反映しにくいからです。この構成ですと学生も消化でき、私たちの研究と現場の話がきっちり噛み合い、講師の中でも新たな発見から研究プロジェクトが生まれることがあります。

今までの経験で感じたことを申し上げますと、提案部署というのは非常に大きいと思います。最初に開講した「日中サブカルチャーの伝統と現代」は全カリの言語部会から提案をさせていただきました。全カリ言語では中国語の授業を担当していますが、学生は中国のことも知らないけれども、日本のことはもっと知らないということがわかり、これではまずいだろうということで立ち上げた企画です。その次のアジア地域研究所が提案部署の「『見ため』の力」は、アジア地域研究所で主催していただいた講演会がもとになって発展したものです。続く2つの提案部署は学部で、来年度の「少女歌劇の100年—近代大衆娯楽を考える—」は、アジア地域研究所が提案部署となっています。今、立教SFR (Rik-

kyo University Special Fund for Research) でやらせていただいているものの研究成果をそのまま還元し、東アジア文化圏という枠組みでやるものです。

こうしてみますと、やはり立教大学では、単に学部だけではなくて、さまざまな部署に所属することができますので、それぞれの部署の特徴を生かした科目を提案していくことができます。私自身は主題別Bをやることで自分も豊かになり、それから、全学部、全学年の学生と接することができますので、彼らの質問や感想も非常に新鮮に感じています。2012年度に主題別Bになりましたから、最後のところで学生の質問や意見を聞いて、それを基に講師間でトークセッションをする時間を確保していますので、特にそれを感じます。複数で担当する場合軸がないとぶれてしまうので、一応、基本的にコーディネーターを務めている私がプロデューサー、お願いする講師の方々はディレクターという形として、それぞれの専門についてしっかり講義していただいたものをプロデュースして1つの作品にするというようなイメージで毎回臨んでいます。

2013年度の「大衆文化・社会論—テレビに見る／テレビから見る—」は、まだ1回目の「ドラマ」しか終わっていません。やはり2012年度にやってみて、不足点が分かるのですね。例えば、2012年度にドラマを取り上げた時に例に挙げたものを学生が見ていない。これでは全然だめなので、テレビ局に勤める方が講師なのだから映像を借りてきてもらおうということで、今度はそれをしっかり見せる。今回はわざと「あまちゃん」の1回目を見せて、それがいかに変わったか。その変化は視聴者の反応だけでなくいろいろな要因があって、そういうことが話さ

れる。また、「半沢直樹」の出来が少し沈んだという6話目を持って下さって授業でしっかり見る。その結果、いかに演技が変わっていったか。特に金融庁の役をやっていた方の演技がどんどん、どんどん濃くなってしまっていると。それに対しての批判ですよ。女形のよさがあったのに、オネエになっているのではないかというようなことが語られたりすると、学生も実感を伴いながら聞くことができるので入ってきやすい。2年目にしてやっと完成形ができたのかなと思っております。あと4回ございますので、そこで大衆文化・社会論を、ひとつの形をつくり上げていきたいと思っております。また2014年度は宝塚歌劇100周年なものですから、それに引っかけたタイムリーな企画ということで「少女歌劇の100年」を開講します。現場の方にも来ていただきますし、東アジア各国のものも取り上げるので、学生もたくさん来てくれるのではないかと期待しております。

できましたら、この画期的な枠はずっと続いていただきたいと私自身は非常に願っております。これで私からの報告は終わりにさせていただきます。ありがとうございました。

○小泉 ありがとうございました。

〈事例報告③〉

スポーツ系主題別Bの事例報告 コミュニティ福祉学部 安松 幹展

○小泉 では、引き続きスポーツという観点から、総合B、主題別Bを開講していらっしゃいますコミュニティ福祉学部の安松幹展先生にお願いしたいと思っております。

○安松 コミュニティ福祉学部の安松です。よろしく申し上げます。

私はコミュニティ福祉学部のスポー

ツウエルネス学科に所属しています。スポーツ系の総合Bから始まって主題別Bの事例報告ということを見せていただきたいと思います。

これまでのことを振り返ってみましたけれども、スポーツ系の科目としては4泊5日で夏休みに実際に新潟県などの山に行って環境の話聞きながら、自らカヌーに乗って川下りをするといった体験学習を実際にやってみたり、あとは、「メディアとスポーツ」、「遊びと人間」、「身体知をさぐる— 技芸にみる身体」といったところで少し身体論的なものも取り入れたり、あとはスポーツイベント、スポーツビジネス系の科目は沼澤秀雄先生がずっとやられています。

最近になりますと、オリンピック誘致に向けたいろいろな仕事に関する話題なども提供してきました。今年度前期にも「2020年東京オリンピック招致のゆくえ」を開講しましたが、やっと招致から開催に話が進みますね。あと、スポーツの部局が提案した以外でも、スポーツの教員が関わっていたものもあります。例えば、「放送80年」や、「現代社会とジェンダー」、「睡眠の文化を考える」、それから「北欧



安松 幹展

モデルの可能性」では1回担当から複数回の担当者として、スポーツの教員が携わっています。

まとめてみると、スポーツというのは非常に学際的な領域ですの

でメディアやマネジメントの方面からスポーツを語る方がいたり、身体知のような「野口体操」や舞踊論のようなもの、それから伝統芸の方をゲスト・スピーカーとして呼んで実際に体も動かし、そういったものを通じてスポーツまたは体について考えることをこれまでやってきた方もいました。

このタイトルをいただいたときに、主題別Bで面白いことと難しいところをぜひ話していいということでしたので、まずは私なりに3つの視点でお話ししてみようかなと思っています。まずはこういった多様な視点・考え方の遭遇、そして教員のFDになる可能性、3つ目が楽しいことでもあり、大変なことでもあるのですが、スケジュール調整のことについてお話ししたいと思います。

1つ目は、これは私が初めてコーディネーターをさせていただきました「侍となでしこから学ぶチームマネジメント」、今思えばなんというタイトルをつけたのだらうと思いますが。私は1999年のトルシエ監督のときにチームスタッフとして関わりました。当時、僕は立教には来ていませんでしたが、そこで数年後に立教で同じ職場の同僚として働くことになるコミュニティ福祉学部の加藤晴康先生と出会いました。さて、そのときのトルシエ監督はチームマネジメントでいろいろな分野の人を取り込んでいたので、その辺りのつながりで関わっていたいろいろな人を授業に呼べないかということからこの授業を考えました。そもそも学生は、代表チームに関していろいろなスタッフがいるということも知らないのではないかということから、1つの目標に向かって、いろいろな考えを持っているスタッフがそこに携わっているということで、チームマネジメント、戦略といった面で、スポーツ以外

の学生にも学べる機会を提供できるのではないかと考えました。これは後ほど苦勞のほうにも関わるのですが、スケジューリングが非常に大変で1回しか開講していません。そもそもサッカー界では週末に試合があって月曜日がオフなので、月曜日の時間を使って監督およびフィジカルコーチやチームドクター、管理栄養士をお招きしました。それから、実は一番偉い人なのですが、チームの総務で統括している事務局の人、そして、広報の仕事をしている方にもお越しいただきました。また、スポンサーの電通の人にも来ていただきまして、電通がキリンとアディダスと全部やっているといったスポンサー論の話も取り上げました。例えば、授業時にサントリーのお水を置いていたのですが、その人はラベルをビリビリとはがして、「日本代表はキリンなので」と。そういうところまで意識するのに学生はびっくりしていました、そのような世界を少しお話しいただきました。あとは道具を用意するエキップメントの人がいたり、ゲーム分析をするスタッフがいる、通訳の方にもお越しいただきました。実は今、全カリの主題別Aでオシム監督のときの通訳だった千田善さんという方に兼任講師として担当していただいています。これが縁で広がっていることもあります。

主題別Bでこれはいいなと一番思ったのは、FDになる可能性ということで、ミゲル・ロドリゴさんというフットサルの代表監督を呼びました。300人ぐらいの授業だったのですが、いろいろ歩き回りながら授業をして、その後授業はどうでしたかと聞くと、「300人のうち、僕は3人の心を溶かすことができなかった」と言ったのです。それ以外の人に関してはみんなもうこっちを向かせて、少し退屈そうな

学生には「ちょっと立ってごらん」と言いながら意識を向けさせたり、いろいろなたとえ話をしたりしていました。そういう授業のやり方があるのだなと勉強になり、実はその後、スポーツウエルネス学科の新入生の授業や新入生プログラムでもお呼びし、スポーツウエルネス学科の先生方にもこの授業のやり方を学んでいただく機会をつくりました。

それと近いインパクトがありましたのが、今やっている「北欧モデルの可能性」という授業でして、僕は2回ぐらいしか担当しないのですが、今いらっしゃっている経営学部の尾崎俊哉先生がコーディネーターで、菅沼先生と渡邊先生とともにデンマークつながりでやっている授業です。スポーツは学際的なのですが、反対に、このスポーツがこの北欧モデルに対しては1つの見え方になって貢献できるというところがまた楽しいと思っています。僕が話している内容は、例えば、自分で健康だと思っている人が一番多いのはアイルランドの人で85%ぐらいあり、デンマークの人たちも、77%は自分が健康だと思っています。では、日本人はどのくらいかということ、実は50%もいなくて半分以上の人が健康だと思っていないということなのです。しかし、平均寿命を見ると、ご存じのように日本はデンマークよりもとても高いところに位置しています。そのため、この結果は何なのだろうという疑問が浮かびました。僕は1年間デンマークに行っていたのですが、持っているアイデアでは答えが見つからず、今回の授業で経済学、そして経営学の先生方の話を聞く中でいろいろとヒントが見つかっていくのではないかなと思っています。僕の中では、子どもが寝ている乳母車を押しながらかなりのスピードで走っている母親や、凍っている運河

のそばを何十人という人たちが普通に走っている光景を目にし、運動するということで自分たちは健康だと思うのではないかと考えています。非常に浅い考えしかなかったのですが、今回の授業を通しいろいろな勉強をさせていただいているところです。

FDのインパクトと言いますと、講義形式でやっているのですが、実は今週からゲスト・スピーカーが来て、翌週は150人ぐらいいる受講生を何グループかに分けてグループディスカッションをさせます。そのゲストから聞いた話をしっかり自分のものに取り込んで、それをしっかりアウトプットするところまでを、この授業で試そうとしています。最初、私ははじめに順番が当たっていたのですが、少し自信がなかったものですから、最後を担当させていただくことになりました。非常に楽しい授業で、こういった授業のやり方もあるのだなと学ぶことができ、まさにFDなのではないかなと思っています。

最後がスケジュール調整の苦勞ということで、こういった方たちを呼んで、1年前から順番まで一応、案は出すのですが、半分ぐらいの人は日にちが変わったりします。そういう意味では、何年も続けられないかなと感じる授業で、私がコーディネーターをした科目も1年間でお休みして、今充電しているところです。

最後に、先日、朝日新聞のスポーツ面ではなく経済面のところに、東京オリンピックをなぜ秋にやらないのかという特集記事が出ていました。暑いときにはパフォーマンスが落ちるのに、なぜ東京オリンピックを夏にやるのだという疑問から始まっているのですが、結論的には、それはもうメディアやスポンサーの問題で、アメリカのほかのスポーツと競合しないためですと

か、ヨーロッパのほかのスポーツと競合しないようにという理由でした。最高のパフォーマンスを見せるのがオリンピックだと思うのですが、メディアの圧力などでそこでは開催できないということです。主題別Bでは、そういったスポーツを題材にした話から少し多方面から考えられる授業を展開していきたいと考えて、今後もやっていきたいと思っています。ご静聴どうもありがとうございました。

○小泉 ありがとうございます。3つの事例報告をしていただきました。

〈パネルディスカッション〉

○小泉 続いて、事例報告していただいた3名の方と中島先生で、パネルディスカッションを開始したいと思います。本日のシンポジウムのテーマは「主題別Bの魅力」ということで、これから大いに魅力を語っていただきたいと思うのですが、まず、最初は理念のところから、資源を共有し、複数の教員が担当するということがありました。事例報告をされた方の中でも、複数の教員、異なった分野の教員が同じテーマのもと一緒に講義をするというものです。その辺りが最初の魅力ではないかと思いますが、中島先生からどうぞ。

○中島 事例をずっと伺っていて、こういう授業を受けられる今の学生は本当に幸せだなと思いました。私が学生のころは、講義というのは、先生が自分が書いている論文を持ってきてただ読むだけで、聞いているほうは全然分からないというのが多かったですからね。それに比べると本当に至れり尽くせりと言いますか。

私は、問題点を指摘する側ですので申し上げますと、初めのころはやはり、それ以前の一般教育の伝統を受け

継いで、哲学的と申しますか、本当にアカデミックなものが多かったように思います。だんだんとやわらかいと思いますか、細井先生のようなサブカルチャー、あるいはスポーツ、そういう科目が増えてきました。それはそれでいいことではあるのですが、若干私が問題をはらむと思いますのは、あまりに学生にすり寄りすぎて、柔軟な知性の発達を促すといったこの科目の本来の理念からそれていってしまう恐れはないだろうかということです。昨年度から新しいカリキュラムを始めるに際しましても、やはり同じような考えから、主題別のほかに領域別という分野をつくり、もう少ししっかりした体系的な中身も加えていくといったような部分も加えております。そういう科目と比較すると、主題別Bはある意味で学生にすり寄ることの究極で、新しい領域別科目と対極に立っています。だから、すり寄りっぱなしでもって向こうに行ってしまうのは困るので、いかにこれを引き寄せるかという知的な総括みたいなことをどのようにして実現していくのが、非常に重い課題なのではないかとも感じました。一番初めに司会者が、この理念が変わったのか、変わっていないかということをおっしゃっていただけども、変わってこざるを得ない面もあるのですが、なおかつ守っていかなければならない部分もあると私は思っております。

○村上 教員にとっての魅力ですね。私は以前に、立教大学アミューズメントリサーチセンターというかなり大きな研究プロジェクトをしておりました。これは大学院の研究高度化の事業だったので、学部の人大学院に興味を持つようにするという目的でアミューズメントリサーチセンターの研究成果を総合Bで取り上げました。学生と一緒にそれを楽しむというような内

容です。そのときには、私たちが思っているアミューズメントというようなものを学生に理解してもらいたい、そして、あなたたちはどう思っているのかを僕たちが理解したいなというような、ある意味、次世代の人との交流という感じが授業の中にはありました。僕たちが研究をしたり、あるいは授業を組み立てるといことは、研究成果に基づき、一番先端的なところを授業の中で説明して共感を得ていくということです。「学際」というのはそういうところからスタートすると思うのですが、この総合Bでやれたというのが面白かったことです。

今回は、最近キャリア教育などということが言われていて、大学を卒業して社会に出た人たちがどういうことに直面をし、そのことが日本という社会をグローバル化しているかということと、どうつながっているのかというポイントを授業の中に持ち込んでいます。そのことを全学の学生に伝え、彼らがどう感じるのかを僕たちも知ることができ、同じような問題意識の発露を学生と共有するという面白さがあります。

また、面白いと思うことに、この授業では学生たちがびっくりするということがあります。例えば、「この間、東京の湾岸にあるホテルが売られて、新聞では500億円で売られたと書いてあるのですが、どうですか」と聞くと、「500億で、うーん…」と言って、「では、500億円で買わなかったということですよ」と再度たずねると、「いやいや、何とも言えませんね」、では、「200億円ですか」、「いやいや…」といった会話から、学生たちはホテルが350億円で売られるということを初めて知るので。そのときの目の輝きみたいなものを見ると、“やったな”と思うのですよ。

そういう授業をしていくと、授業に対する学生の食いつき方が違うのです。本を説明しているとき、あるいは理論を説明しているときに比べると、ここに面白いものがあるのだという感性を学生と共有できるのです。

僕たちのほうが少しよく知っているから教えてあげるのですが、「どう思いますか」と双方向に授業を展開していくことができます。その問題意識の発露を学生と共有するというのが、この総合B、主題別Bの教員としての喜びだと感じております。

○細井 私の場合は、自分が演劇学ということもあって、常日頃、「楽しそうですね」と言われるのですが、確かにやっているものは楽しいのだけれども、実は、大きな問題を背景に持っています。2014年度に開講する「少女歌劇の100年」では、日本の近代化を考えると、日本の大衆芸能、大衆文化は非常にいろいろな意味を持っているということを考えたいと思っています。日本の大衆芸能、大衆文化における近代化は西洋化と極言しても誤差は少ないのですが、東アジアの一部の国にとっては日本化であり、そういう意味で私たちの非西洋文化圏における舶来文化の受容とは何なのだろうといったことにつながっています。しかし、いきなりそんなことを言っても全学部、全学年で構成される学生たちは消化不良になります。まず理論よりも感じてもらうことが大事で、そこから始めます。今回のテレビなどもそうですが、毎回、つければ見られる一番身近な居候みたいな存在、それが実は大衆文化をつくる上で非常に大きな効果を果たしてきたことに気づき、なぜそうなのか、今後はどうなのかなどにつなげていく形でやっています。

集中でやることのいい点は、しっかりやることができるということですが、月に1回しかやれないということでもあります。そのため、1回で完結する形にしなければいけません。全部終わってから試験をやるのですが、そのときまで毎回フィードバックをしたり、リアクションペーパーをとったりして学生の意見を聞き、そこでトークセッションをしますが、1週間ごとに積み重ねるタイプがもつ連続ドラマのような良さはありません。そのマイナス面をどういうふうにかバーしていくのかが、この主題別Bの大きな問題かと個人的には考えています。ただ、やはり集中型でやれるよさというのは、そのマイナス面を補って余りあるいいところがあります。できればその形を続けながら、そのマイナス面をどう補うかというところをいろいろ工夫していこうと考えています。

いずれにせよ学生も、普段は会えない現場の人たちに会えるということも楽しんでいるようです。それから、この間、面白いと思ったことなのですが、例えばドラマをテーマにしたときなどは、学生から「なぜ『半沢直樹』はヒットしたのですか」という質問が出て、「いや、何がヒットするかなんて全く分かりません、全部同じようにやっているのだけれども、視聴率が数%のものもあれば、ヒットするものもある」と。「キャスティングの成功か」という質問には、「『半沢直樹』のキャスティングは耳が出せる人という選び方だった」など、現場の人たちだからこその話が出てくると、学生は「おお」と興味をもち、また違う角度から考えていくようになります。また、昨年度の場合は、学生に「では、あなたが自分でもし番組をつくらせたら、どういうものをつくりますか」という問いに対して意見を出させて、それをまた語っていくといった形もとりました。「少女歌劇」の場合はまた

違う工夫をしようと思っています。集中開講1回分を常に1つの小作品にして、数回で構成して作品として完成させるために、「今回はコメディータッチでいこう」などといったことも重ねてきました。私の所属は異文化コミュニケーション学部ですが、やはり学部のカリキュラムや学部の意向というのと、自分がやっている研究プロジェクトがぴったり合っていなければこういった科目はできませんし、集中開講方式は学部の授業では実現が難しいタイプです。主題別Bの枠で、今取り組んでいる研究プロジェクトの成果を学生に直接渡せるということが、担当している教員としては何よりもうれしいことだと感じています。

○安松 魅力ということ言えば、やはりいろいろなゲストの方の話を聞いて、実際にどんな話をされるのかというのは、大まかなテーマは事前にお話ししていますが、知らなかったことが本当にたくさん聞けるという意味では、僕らも授業を受けて新鮮に感じる場所があります。今まではたくさんの多様な考えを聞くということでは非常にいい授業だと思いますが、全カリなので、また多様な学部の学生が受講しているというのがこの授業の特徴でもあるわけですね。先ほどの「北欧モデル」の話をしていきますと、本当に新たな試みがあって、学生同士でグループディスカッションの時間を設けています。いろいろな学部でミックスした学生たちのグループをつくってみると、あのゲストはこういうことを言っていたがどういう考えを持ったのかというディスカッションにも、学部ごとにいろいろな違いがあり、またそこで二次的に盛り上がるすることができます。それが実際、どのようにアウトプットしてくれるのかというのが、今、僕らが非常に楽しみにしているところで

す。そういった意味で多様な意見を聞くだけではなくて、また学生たちでそれを盛り上げて、話し合えてアウトプットできることというのは楽しく、魅力的だと感じています。

○小泉 ありがとうございます。主題別Bがかなり研究プロジェクトとつながっているという話が、村上先生の話にも出てきたと思うのですが、その辺りは、細井先生、いかがでしょうか。

○細井 最初に一番長く開講していた科目は、それまでにやっていた複数のプロジェクトを毎年、テーマを小出しに分けて取り上げていました。学生に伝えていくために、もう1度消化し直し、再度新しい情報を入れるということをやりますので、そこでもう1度自分たちの分野も活性化ができるということに非常に感じました。それから、外の方に立教に来てお話しいただくということが、やはり外部の方にとってもそれは非常にチャレンジングで、楽しく、そして学生に伝えられることが嬉しいということもおありのようです。そのため、ものすごく一生懸命、準備をしてくださるのです。そういう様子を見てみると、事前の打ち合わせももちろんしっかりやるのですが、こちらも気が引きしまり、こうやって来てくださるのだから、それをちゃんと受けてきっちりつくらなくてはと感じます。そういった緊張感みたいなものが学生に伝わるようで、結果的に「日中サブカルチャーの伝統と現代」は、それまでの研究プロジェクトの成果や内容を学生に提供し、授業後にまた違うプロジェクトにつながるという循環が生まれました。

○小泉 村上先生は、最初からかなり研究に密接に関連しているように聞こえたのですが、いかがですか。

○村上 たしかにRARC（立教大学ア

ミュージメントリサーチセンター)のときには、研究成果を学部の皆さんにも還元するといった趣旨で行って行きました。なぜかという、オープンリサーチセンターでしたので、大学のお金を半分いただいているため、ちゃんと学生に還元しようということからです。

今、細井先生と近いと思っていることは、我々は先ほどお話ししましたように、観光研究所の中に産学連携の研究チームをつくり、そこでまず産業界の方にとって利益のある研究プロジェクトを運営しました。その成果を学生に還元するときに、「すみません、皆さんも授業に出てみませんか」とお誘いをしました。登壇される方は、本当によく準備をしてきてくださって、ラグジュアリービジネスのときには、自分のブランドの商品を着てきて、片足8万円の靴を授業中に回すということもありました。我々にとっても片足8万円、両足16万円は高いと思います。

しかし、学生の皆さんが片足8万円の靴を授業中回されて、それを触ったときの驚き方はすごく、質問もたくさん出てきました。「この靴、もしこの底がすり切れたらどうやって直すのですか」という質問に対し、その講師の先生が「直しませんよ。次にまたお買いいただくんです、16万円で」という話の面白さ。そういうことを、僕たちが研究会の中で話題にしていき、結局、高いものや高級なものというのは、社会にとってどういう意味があるのかを考えていくなどの循環が生まれています。

特に旅行は廉価であることが重要だと多くの人が思っています。しかし、反対に観光研究所の研究会ではどうやったら高級で高いものを世の中に提供することができるのか、その消費者たるものはどういう能力を持つべきなの

かを僕たちは研究しています。

研究会にはいろいろな業種のいろいろな会社の人が集まってきましたが、彼らが研究したいこともそういったことなのです。ですから、BVLGARIの人も、TOD'Sの人も、LOUIS VUITTONの人も考えていることを研究会では共通の話題として議論して、次にそれを学生に還元したいと思っています。研究にはいろいろな研究の仕方がありますが、恐らく経営学部、経済学部と我々が共有できる部分というのは産業界の人が疑問に思っていることを取り込んできて、それを学際的に処理する最初のポイントをこの主題別Bでやるということかと思えます。そこはとても面白いですね。

○中島 つまり、授業にいらっしゃる方の相当部分にとっては、学生たちをマーケティングの対象としているところもあるのでしょうか。やはり学問というのはそういうものなのですね。お互いに利用し合うような関係がある中で、成り立っているのですね。それが本来のあり方なのでしょうから、何かしらできあがった知識を学ぶということとは違う刺激を受けるだろうということは想像つくのですが、糸の切れた凧みたいにどこかに飛んでいってしまう恐れはないのかなという危惧は、編成する側としては、正直申し上げまして感じております。でも、そのスリリングなところがこの全カリ主題別Bのいいところなのかもしれないとも思っています。安松先生、いかがでしょうか。

○安松 確かにスリリングではあると思っていて、やはり重視していたのが、いわゆる講演会に有名な人を呼んでずっと連続するというわけではなくて、そこからどうやって文学的に、また経済学的にどういった視点で考えられるかというところは、ゲストの方

にはテーマを出させていただいて、そういうものをリアクションペーパーのタイトルにするなどの工夫をしながら、授業の水準というのは気をつけながらやっていました。

○中島 実際のところ、連続講演会にならざるを得ないというのは、やはりスケジューリングが大変だと、これは各先生が共通に言われましたけれども、それをサポートする資源は残念ながら、現在のところ非常に不足している。つまり、先生ご自身にスケジューリングの細かいところから全部やっていかなければいけないという仕組みがあるがために、せっかくアイデアを持っている先生も、それが面倒なのでなかなか入ってきていただけないという面が大きいのかなと考えております。実際のところ、私は経済学部ですから、経済の教員を見渡しましても、学際的な、学生が面白がりそうな研究をやっている人が結構います。しかし、水を向けてみても、「面倒だから」という理由で科目開講につながらない。その辺りを何か突破できないかなと考えてはいるのですが、なかなか、これ以上の資源投入というのはなかなか言い出しにくいところがありますので、何とか工夫していけないかなと思っております。しかし、本日話を伺って、その辺りの困難を3先生とも工夫して克服しておられることを知り感動しました。

○小泉 「2年ルール」について、取り上げたいと思います。

○中島 本日伺った話だと、そういう話だったら3年でも4年でもやっていただきたいなど。先ほど、少し水を向けてみましたら、3先生の間で若干、反応が異なっておりまして、いや、もう1年でこりごりしたという言い方をされる方もいれば、これだったら何年でもやってもいいという感じの方もいら

したし、その辺りの受けとめ方はいろいろですね。このルールをつくったときにいろいろ危惧したのですが、やめるとい話はないにしても、今後はさじ加減ですよ。どれぐらいのところを同じ企画と認めるのかといったようなこともこれから考えていかなければいけないような状況でもあります。本音のところをぜひこの機会に、僕としては聞いておきたいということがあります。いかがでしょうか。

○村上 私は2年ルール賛成派なので。今回の私たちの2つ出ているラグジュアリービジネスとアセットマネジメントですが、まずお話ししているように、昨年、研究会をやり、その成果を今年度の授業で、ゲスト・スピーカーの人を交えてやり、そして、それが成果物や報告書、本になっていく。そして、今度はそれらを読んでほしいと考えています。しかし、今、アセットマネジメントでは投資の側の話だけをしています。投資には幾つかのタイプがあり、投資信託にもいわゆる安全なものもあれば、もっとギャンブルみたいなものもある。そういう多面的な話になってはいますが、一方で、投資をされる対象というものをどうやって用意していくのか、社会がそれをどうやってそれを用意していくのかというようなことも、テーマとして取り上げることができると思います。

まだ主題別Bで取りあげられるか分からないのですが、例えば、負債を背負った企業が倒産をした、その後をどうやってきれいにして、そこにアセットマネジメントを導入するかというのは、日本ではやはりすごく重要な問題になっています。少子高齢化が進み、経済力が地方ではどんどん落ちていく中で、どうやって地域を再生産していくのかは重要な課題だからです。

特に観光にとってそれは重要な課題

であり、次のステップはそういった方向へ進んでいくことになるでしょう。そうすると、今我々は実業界のファイナンスの方と一緒にやっていますが、恐らく次は法律の方だとか、行政の方と一緒にやらないと、整理のところまでいかない。

そのため、僕たちは1度きちんとした報告、著書をつくり、それを学校の中に還元したら次のステップに進んでいくということになっています。それは恐らく3年目、僕が定年になる前の年ということになって、そのときに主題別Bがやれるかどうか分かりませんが、そういうふうになると、多分、後継者の方がそこにまた参加してきて、次のテーマをつくると。そしてまたそれを全学に還元していくというようなものだろうと思っています。ですから、僕は、2年ルールというものは、僕たちに周期的な作業の課題を与えてくれるものだと考えています。

○細井 私は2年では少し短いと実際に思っています。というのは、1年目にしっかりつくるわけですが、学生の直接の反応を見ながら、特に現場から来てくださる方などと、もう1度再構成をし、だいたい2年目に完成形を展開して、非常にいい効果になるのです。また、「『見ため』の力」では使用する道具の関係で100人の人数制限をかけていたので、4年目にやっと履修できましたという学生が何人かいました。来年開講する「少女歌劇の100年」は1年でやめようと思っているのですが、どうなのだろうかと思う部分はあります。科目の内容がバージョンアップしていくのであれば、3年まではよいなど、何らかのバッファがあるとありがたいと考えています。

○安松 私がやった侍となでしこのサッカーの科目は、やはり僕らコーディネーター側が疲れてしまって、1年で

終わってしまったのですが、実はゲスト・スピーカーでいらっしゃった方たちからは、「来年もやらないのか」という話がありました。そういった意味では、ゲスト・スピーカーの方にとっても2年は続けたほうがいいのかと思います。しかし、3年目以降はやはりアップデートしていく必要もあると思います。例えば、沼澤先生がいらっしゃっていますが、今、オリンピックのテーマ、ビジネスのテーマをずっと続けていますが、本当に内容を変えながら、同じ方たちを呼んでも話す内容も少しずつアップデートしていくというやり方をとっていらっしゃるので、そのように継続的にアップデートすれば、3年目以降も続けていけるのではないかなと思っています。

○中島 安松先生はチームメンバーでもあるので何か気を遣ったのかもしれないですけども、本音はもっと、やはり2年ルールに何か思っているのかもしれないです。内容をフレッシュにしていくという点では、やはりこのところは譲れないとも思うのですが、きょうのシンポジウム全体について、私は非常にショックを受けたというか、感動したというのは、皆さんが本当に熱心に取り組んでおられるということでした。僕は最初にそんな風の糸が切れたようなことで大学教育として成り立つのかと、辛口のことを申しました。企業の市場調査でもサブカルチャーでも、あるいはスポーツでも学生を楽しませるだけというのだったら、レジャーセンターと変わらないのであって、最後に何かしら知性というか、哲学的なものでキュッと締めるということがなければ、大学教育とは言えないのではないかというイメージで僕は主題別Bをとらえていたのです。しかし、最後に何か理屈っぽいことを言って収めるなどということは、単に教員

の自己満足だったのかなと思う部分がありました。学生はそういったことはなくても、得るものは得ているので、そう割り切ることが、やはりこれからの時代はより積極的な大学教育のあり方なのかもしれないと、本日の話を聞き全カリのチームリーダーとしての使命感が若干動揺しました。

ただ、動揺はいたしました。このルールに関しては、やはり続けるという結論しかには今のところは考えつかないです。

○小泉 少し話題を変えますが、村上先生のところは遠隔共同講義という形で授業をやって、これは新しい形だと思えるのですが、これが全カリの主題別Bにとってどういう位置づけになるのでしょうか。

○村上 教員の皆さんは国際会議などをやるときに、セッションにインターネットを使って、別の大陸の人たちと一緒にディスカッションをするというのは結構あることだろうと思います。それから、交通条件のよくないような国、例えば、カナダの冬などは、インターネットを使った授業というのはもうごく当たり前になってきています。マレーシアもそうです。そういうようなことを考えると、インターネットを使った授業自体は決してむずかしいことではないのではないかと思います。問題は、これを15回きちんと続けるためのサポートする技術が、実は私どもの大学の中にはまだ十分には育ってなくて、ここのところをいつもメディアセンターがはらはらしながらやってくださっているということです。

すべての学部で同一に教育を受けるということにも意味があると思っています。そして、特にこれから飛躍的に増加するであろう観光需要を僕たちが見るときに、どういう視点があるのか。ことしはラグジュアリーとアセットマ

ネジメントという視点で開講したのですが、この視点を全学で共有しながら、その先に何かを考えてもらいたいというようなことです。

一方で、細井先生がやられているようなある種、劇場性を持ったような授業をこれでやると、新座の人はお客さんになってしまって、舞台を見ている人みたいになってしまうので、その参加は難しいと思います。ただ、一方で、半分ぐらい講義、あとは先生たちの質疑応答、それから学生の質疑応答をみんなが聞いて、そして自分たちの知識をつくっていくというタイプの演習のような授業も、主題別Bでは難しいと思うこともあります。ある種、一方的なものを全学に配信していく。あるいは、場合によっては関係の大学に配信していくということは、僕ではできるようになったのではないかと思います。

○細井 少し教えていただきたいのですが、やはり生のゲストを目の前にしてお話を伺う場合と、映像を通すと違いますよね。そうすると、このゲストの方には、両方のキャンパスにちょうど同じぐらいの人数が行くように配慮されるのですか。

○村上 いえ。ゲストは、今のところ池袋だけです。なぜかというと、新座にゲストが来たときに、はたして今までどおりにメディアが対応できるかという不安があるからです。池袋から配信したものを新座で受けるという方が随分と慣れているので、後期に新座から2人予定したのですが池袋に変更しました。

万が一、そこで授業が途切れると大変です。こちらは6人ぐらいの人が対応してくれているのですが、新座は2人で対応するので、万が一、向こうから出たものがこっちに届かないときには、大変なことになります。で

すので、今年は一方的に、こっちから向こうということになっています。

○細井 ありがとうございます。

○小泉 いかがでしょうか。

○中島 インターネット授業について申しますと、今、日本で普通に行われているインターネットは、固定カメラで講師を映したままになっていることが多いように思います。それに比べますと、ここでやっていることは、複数のカメラで、教員だけではなく、聴衆の側も別画面に映し、質問があればその人を映すという方法をとっています。やはり多くのカメラマンが必要となるわけですね。

○村上 そうですね。

○中島 膨大な資源を使ってやっているため、それを広げていくということもなかなか難しい。そのため、将来的には、そのカメラマンも学生のボランティアの有志を募るなどの方法をとれば、もう少し資源を抑えることができるかもしれません。しかし今は、手間をかけてやることによって、ある程度活性化が図られてきている段階で、まだまだ物的な面での課題は大きいと考えています。

○小泉 まだ話は尽きないと思うのですが、時間に限りがありますので、この辺で佐々木先生にコメントをいただきたいと思います。

○佐々木 文学部の佐々木でございます。本日はどうもありがとうございます。きょうはコメンテーターということで少しお話をさせていただきます。私は今、文学部の教員ですが、まだ一般教育部があって、一般教育課程というものが行われていた1995年度以前は、一般教育部に所属しておりました。全カリはまだなかったのですが、その頃にもそこで今の主題別Bのような、一般教育科目の「総合科目」というものをやっていたことがあります。

これは、3人から5人ぐらいの教員が、毎回、全員が出席をして、1人が話をして、残りの30分ぐらいで他の教員たちが総攻撃をかけるという怖い授業でした。時には教員が色めき立って、「何を」と先生同士がけんかしていることもあり、学生には非常に話題となった授業でした。その後、私は一般教育部が廃止されて全カリが立ち上がる時の、まだカリキュラムがない時代に、今、フロアにいらっしゃる寺崎先生のもとで総合科目の専門委員として全カリを立ち上げるための活動をさせていただきました。そして、先ほどのような授業担当の経験がありましたので、この総合B、現在の主題別Bの科目というのをつくらせていただいた者の1人になりました。

その観点から言いますと、本日伺いましたお話は、隔世の感があるように感じました。本日付けさせていただいた資料に科目表、テーマ一覧というのがございますね。これを見ますと、全学共通カリキュラムが立ち上がった1997年度から総合Bという科目が始まっています。しかし、初年度はご覧のとおり7科目ですかね。このくらいやるのが精いっぱい、7科目でもなかなか大変でした。それが現在ではもう20以上あるのが当たり前という盛況で、さらに本日のお話を伺ってお分りになるとおり、非常に熱心に、内容もバラエ



佐々木 一也

ティがあるだけではなくて、深くしっかりとした柱を持って行っております。こういう制度をつくらせていただいた一人としては、大変にありがたい、素晴らしい、もう涙が出るぐらいうれしいという感想を持っております。

その中で、いくつか私が最近の主題別B科目について考えていることを簡単に述べさせていただきますね。もともとの科目は複数の教員が常時出て、学生の前で学問の多様性、あるいは相互の分野の違い、考え方、発想の違いがあることを見せ合おうという趣旨でもありました。そもそも大学の授業そのもの、これは専門も含めてだと思のですが、ある正確な知識、すなわち、できあがった知識をただ覚えるために学生の前に提示するのではなく、知識というのが、大学の研究者によってつくられているということをそのつくられている現場に、多少なりとも学生に参加させることによって、学生に知らしめ、彼らにも知的に、クリエイティブに活動する方法を身につかせるということだと私は思うのです。これはもう専門科目でも教養科目でも同じだと私は思っています。専門科目の場合には、ほかの科目との連関、カリキュラムの構造全体をより強くして、科目同士のつながりというもの重視していくわけですが、教養系の科目は必ずしもそうではなく、単発であることが多いですね。そうになると、中島先生がご心配するように、糸の切れた風ようになってしまい、科目それぞれがバラバラで学生が自分の興味関心やいろいろな利害に基づいて取っていくという形になってしまいがちです。その点、この総合B、現在の主題別Bは、学生の前で複数の専門を持った教員が、それぞれの違った角度から同じテーマについて話をし、しか

も相互に討論をするため、大学の授業の本義であるところの研究のプロセスに何らかの意味で立ち合わせるということを便宜的に行いやすい科目だと私は思っております。そういう意味で、主題別Bはますます発展していただけることを大変期待をしています。

本日伺った中でも、例えば、学際性とか、相互性とか、あるいは多様性というものは十分に実現されていると伺いました。学生の観点からすると、大学での勉強はどうやるのか、勉強してどうなるのかというのを、壇上で真っ赤になって討論している先生を見て、なるほど、こんなふうになるのだとか、こういうふうにものを考えていくのだということが分かる。学生の学習というところをとっても、実例として学ぶ姿勢というのが分かる、実演されているという姿勢が今日のお話でもよく分かりました。

それからもう1つ、教養科目、特に総合ということでよくいわれるのですが、それぞれの別々な科目ですよね。学生が幾つかの科目を聞いて自分で総合しなさいということになっていますが、これは実際にはなかなか難しいことです。この主題別Bの科目ですと、総合の生きた例が教員の姿としてそこに出されています。しかも相互に違うということを生かしながら、しかし、まとまっていく。知識というのはオープンなだけけれども、同時に、議論することによってそれぞれに固まっていくコアというものがあるというものを見せるという、大変効果的な教育科目なのではないかと思っています。これも十分に実現しているのではないかと思います。そういう意味では、主題別Bというのは教養科目の王道と言ったらいいでしょうか。また、担当する教員にとっても、自分たちの学問

の研究や、そして、研究と教育の統合というフンボルトモデルの大学の理想はありますが、この科目に関しては、その理想の一端を実現しようとしているというような感じがいたします。ただ、これを維持していくということはなかなか大変なことで、本日のお話でも十分にあらわれていたかと思うのですが、コーディネーターの先生のご苦労は並大抵ではないですね。私もかつて7年ほど同じ科目のコーディネーターをしていたことがあるのですが、私の個人的なことを言わせていただきますと、私が一番大事だと思っていたのは、科目担当者同士のつながりです。総合Bとしていろいろな方が授業に出てきて、討論などをするのですが、全体としてつながっているということも必要で、そのためには、次に登壇する人が前の授業で何をやって、何が問題で、何が盛り上がったのかということを知っていることが必要だと思っています。しかし、講義者がゲスト・スピーカーの場合には、毎回の全ての授業にいるわけではないので、私は毎回授業の報告をつくり、その日のうちに担当者全員に配信していました。これは結構大変でした。授業が終わってから1時間ながしの時間で、メモをまとめてメールに書いて送信するというのを毎週やっていました。また、他の先生もおっしゃっていましたが、スケジュールの調整も大変でしたね。そういう意味で、総合B、主題別Bをサポートする方、事務局で継続的に主題別Bを見ている方が1人でもいてくださるとありがたいなと思います。このようなことを言いますと、これはまた、既に資源を使っている、さらに資源を要求するのかと怒られるかもしれませんが、主題別B専属の方がということではないのですが、継続して、すべての科目について内容をよくご存知で見

ていてくださる方が1人いらっしゃるとうれしいと思います。そういうサポートを得た上で、どこまでスリリングで緊張感のある教員間の関係をこの壇上で学生の前に示していただけるか。そこがこの主題別科目Bの命であり、その出来不出来がこの科目の死命を制すると私は思います。その意味で、全カリ運営センターの皆様方が、力を合わせて主題別Bをサポートしてくださることを心から願って、簡単ですが、私のコメントとさせていただきます。どうもありがとうございました。

○小泉 ありがとうございます。それでは、もう少し時間がありますので、会場からの質問やコメントがあれば受けたいと思います。何かございませんでしょうか。

○質問 25年前に立教大学を卒業しまして、今、働いているのですが、今回、このすばらしいお話を聞かせていただきまして、まことに勉強になりました。ありがとうございました。

1点質問ですが、学際や、統合、総合とかいう話はよく分かったのですが、各学生はそれぞれの学部に入っていて、もちろんそれぞれのスペシャリストとしてのところも学んでいると思います。その学生が自分のバックボーンを持っている中で、こういうところに参加できる、その学生のバックボーンを生かすような何か工夫とか取り組みがあったら教えていただきたいと思っています。

○中島 学生の側からのフィードバック。つまり、教員の側は聞いている学生が特定の学部には属しているわけではなくて、いろいろ混ざっているということ的前提にしていろいろな問題を投げかけているので、それぞれの学生がそれに対して自分がそれまで持っている知識でもって回答を出そうとする。

それを戦わせるということも多かれ少なかれ、各先生は授業の中に組み込んでおられると思っています。そういうことで教員も学ぶし、学生も相互に刺激を与え合う中で総合がなされていくというのが、本来のこの科目の理念です。それは一番初めにお見せしたシラバスにもきちんと書かれておりますが、実際のところはどうかというものは、個々の先生に伺いたいと思います。

○村上 私の科目では、ゲスト・スピーカーの方に60分ぐらいお話をいただき、その後、我々と教員とゲスト・スピーカーの先生とのトークセッションみたいなものが10分から15分あります。そして、学生の質問コーナーがあり、そこでいろいろな学部の方の質問があります。経営学部の方は経営学部のバックボーンから質問してきますし、社会学部は社会学。比較的学年の上の人が相手の授業ですので、それが最初から分かっていますから、質問は、これは経営学部っぽいな、これは経済学部っぽいなという質問になります。

ゲスト・スピーカーの方がお答えになるのにはやはり限界がありますので、今度はそれを私たちが補足していくという形で、学生へ還元できているのではないかと考えております。

○細井 私の場合は、今年度から午後開講にしたので、急に1年生が増えました。そうすると、バックボーンも何も、とにかく大学の勉強に対する姿勢がまだきちんと定まっていないようなところがあります。もちろん上の学年で自分で制作もやっているような学生も入ってきますので、以前よりは少しばらつきが激しくなりました。そのため、学生の意見を聞くだけではなく、こちらには名簿がありますので、名指しで当てる、例えば、3年、4年で映像

身体学科の学生に「あなたは どう思うの」と振ってみると、いきなり当ても経験に基づいたいろいろな発言をしてくれます。また、講師は3人ですので、やはり1つのことを3つの観点から話します。そして、あなたの4番目の意見を聞かせてほしいといった形で意見を求めるので、学生から見れば必ずしも教員とか教壇に立っている人間の話を全部正面から受け取らなくても、批判的に聞いてもいいんだというゆとりができて、それが少しいいのかも少しれない。

ただ、とにかく1年生がこんなに多いのは初めてなので、戸惑いながらやっているところですよ。

○安松 新座でサッカー関連の授業をやったときには、池袋の学生が新座に来て受講している学生が、何人か前のほうにずらっと座っていました。学生には社会学部でジャーナリストを目指していますと言って質問したり、経済学部の何とかですと、必ず学部を自分で言って質問するというふうにすることで、それぞれの学部の専門性というのは、ほかの学部の学生にも見えてくるのかなと思ひ、できるだけ、先ほど村上先生がおっしゃったような時間配分にして、最後の30分ぐらいは学生とのやり取りをと考えてやっていました。

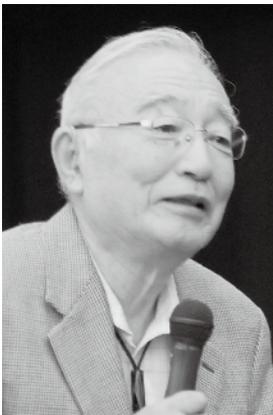
ただ、やはりなかなかそういう学生も少ないので、1回試みたのがTwitterで、授業中どんどん自分の学部と名前が出るように画面も使って質問を受けるようにしていたのですが、やはり「面と向かってしゃべろうよ」となり、1、2回やって、加藤先生と相談のうえ、「ちゃんと手を挙げて聞きましょうね」ということになりました。

もう1つ、今やっている「北欧モデル」のほうは、そういった意味で、隔週でゲストを呼んで、次の週はそれぞ

れの学部をもうばらばらにしたグループをつくって、そこでお互い意見を戦わせて、1つまとめようというところまで試みようとしています。またそれは楽しみにしているところです。

○小泉 どうもありがとうございます。では、ほかに何かございますか。

○質問 先ほどの佐々木先生のお話と全く同感でございまして、私は初代の全カリ部長を務めました寺崎と申します。やはり同じように、きょうのお話を伺って感動いたしました。少し思い出を加えながら申し上げてみたいのですが、1つは、かつて、1997年に7つの科目が出てきたころですね。出てきたというよりも、出すことになったころ、私は本当に心配しておりました。果たしてどの枠からも出るだろうか、2つか3つぐらい出れば御の字ではないかと思うのが僕の実感でした。そういいますのは、それまでおりました東大で、同じような全学共通の公開授業を受け持ち、それをオーガナイズする責任を持たされました。そのときに、いかに自分の専門外のことを総合的に授業をするということに、先生方が消極的であるかを身に染みて感じました。ましてやこの立教の場合、当時の学部の中から



寺崎 昌男

1つずつ出ていただくということではできるでしょうか。総合部会長であった野田先生に僕は何度も確かめました。この主題別Bは大丈夫でしょうねと。最後に

7つの科目提案が出てきたときには、本当にびっくりいたしました。学部が5つ、プラスして大学教育研究部ともう1つ。7つもの提案が出てきた理由は非常にリアルなところにあったと思います。それは何だったか。もちろん非常勤講師のコマが来るということですが、これはどなたが考えた策略か知りませんが、ともかく引き受けたどの学部にも非常勤講師のコマが3つ来るという事。当時は、もう欲しくて欲しくてたまらない非常勤講師のコマなので、これは非常に大きかったと思います。しかし、それだけかという、そうではなく、やはり東大との違いは、立教の先生方が持っておられた、学生を中心に大学全体を見ていくということをつめらわれないお気持ち、僕はこれが非常に強くベースにあったような気がいたします。その流れがきょうのご報告のようになってきているのではないかと思います。

補足して、苦勞のことを申しますと、その当時、私が一番心配したのは、1時間来てもらって話をするゲストの方にお礼ができるだろうかということでした。当時、国立大学の非常勤講師への謝礼の原則は、2カ月は来てもらわないと謝礼は出せないということです。そうなると、8回呼ばなければいけない。そんなことはとてもできない。1回来てもらえればもう十分だということにどうしたらよいか。しかし、これは立教の中の人事部の方たちが「いや、大丈夫です、先生。1回来られた方にでも、1回分の謝礼は出すことはできます」と言われたので、実現したのです。そういうわけで、一事が万事、成立そのものが非常に大変な中で、出発できたことを今、あらためて思い出しました。

1つだけ問題提起をしておきたいと思います。それは、確か2004年か2005

年だったと思いますが、1回だけ全カ
リの外部評価というのを頼んだことが
あります。その外部評価委員の報告書
が残っておりまして、あのときに忘れ
られないのは、そのときに来られた外
部委員の方たちが口をそろえて心配し
ておられたのは、大変すばらしい総合
Bのテーマ別科目なのだけれども、果
たして学生たちが分かっているだろう
かということです。日本の高等学校の
卒業生たちは、ただ受験勉強を通っ
ただけで、高等な普通教育というこ
ろは完成していない。そこへあの高
度なすばらしい内容を出したところで
本当に分かるのか。これは1人や2人
ではない委員の人が、感心した裏で心
配しているのです。それはもっと廣く
言うと、教養教育における学習のシー
ケンス、順次性はどう保証したらよいか
という問題につながっていくような気
がいたします。しかし、当時はそんな
ことを言われても、1年生から受ける
といえば、そのように授業を展開す
ればいいのですと考えるほかなかった
ということがございました。しかし、教
養教育における学習のシーケンスをい
かに築くかという問題はやはり残っ
ているような気がいたします。

○小泉 ありがとうございます。ほ
かにいかがでしょうか。

○質問 本日は貴重なお話をありが
うございました。パネルディスカッシ
ョンで、教員にとってのメリットとい
うことで、研究の推進とか、企業の方
とのつながりみたいなお話がありま
したので、お伺いしたいのですが、この
科目をきっかけというような形で、企
業の方や、研究者の方と具体的に一緒
に何か新しい研究をやろうといった話
になったことがあるかということと、
もしそういう話になかなかならないと
いうような場合は、どういった働きか
けがあれば話しが進んでいくのかとい

うのが、もし何かご意見があったらお
伺いしたいと思います。先ほど佐々木
先生のほうから、全体を通してのつな
がりですとか、サポートスタッフとい
うような話もありましたので、そのよ
うなことについてお伺いできればと思
います。

○村上 私が先ほどからご報告をさせ
ていただいておりますように、最初に
社会連携をして、そこで企業の方々が
考えておられる問題を大学の中に取り
込むという作業が必要です。そうで
ないと、授業で出会って共鳴するとい
うことは、企業の方が組織として何か
していること、何か問題点だと感じて
いることを大学の授業の中に持ってく
るということは、組織活動としてあま
りないだろうと思います。そのため、
やはり研究会をきちんとやって、そこ
で問題点を把握していき、問題を解決
していくことが、大学とつながるとい
うことのメリットだと企業の方に思っ
ていただくことが重要だと思っていま
す。

そして、この問題に将来取り組むで
あろう学生たちに、どうやってその導
入部分を説明するのかということをも
彼らと一緒に考えています。この手続
きがないと、やはり特に経営や収益を
伴うようなマネジメントを組織として
やっている場合、その中にある問題が
表に出てこないのです。

○中島 その研究会の成果というのは
どういう形でアウトプットされるので
すか。

○村上 研究会の成果は、毎年、報告
書を作成しています。観光研究所の研
究会はオープンなのですが、やはり会
社の方は自分のところでそれほどオー
ペンにできることとできないことがあ
りますので、実は教材をいただしてい
ても、その教材を学生に還元できない
場合があるのです。

例えば、2年か3年前の収支計算書などというものの細かい店舗別の資料は、本来出してはいけないものなので、授業中には出てくるのですが、それを記録として残し、後で学生に配ることはありません。そんなことがあるので、実は報告書としてまとまっているものはあるのですけれども、それを今後どうやってさらにこの研究の材料としていくかということはこれからの話し合いで検討しようとしているというような段階です。

○小泉 ほかにいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

では、最後に締めていただきたいと思います。

○菅沼 全カリ副部長を仰せつかっております経済学部の菅沼です。私もこの主題別Bは非常に大切な、立教大学の特に研究にとって大切な母体ではないかなと思っております。私ごとで恐縮ですけれども、安松先生の話にも出てきた北欧系の科目ですね。その他にも北欧と名前がついている科目はすべて関わっていて、すべての回に参加、出席していると思います。

最初の北欧の企画のときは、私は北欧に一度も行ったことがないのに、



菅沼 隆

当時のコーディネーターと一緒に社会福祉研究所をやっていた石原さんという人に無理やり誘われて参加しました。科研費も同時に出席ということで、参加をしたの

ですが、そういったきっかけだったにも関わらずこれが非常に面白い。そして、私は社会政策が専門なのですが、やはり北欧についてきちんと研究しないとまずいだろうということで、授業をやった年に北欧を旅行して、それから3年後は研究休暇でデンマークに留学し、その翌年には研究発表を北ヨーロッパ学会でしたのです。その後、すぐに理事になってほしいという話があり、理事になって、今はもう少し重たい役員をしております。この主題別Bをきっかけに、私は新しい研究分野を持つことができたということがありません。

本日3人の先生のお話を伺って、非常に興味深かったのは、個々の先生はいろいろ面白い研究をやっているのですが、自分の持っている専門の授業ではその成果をきちんと発表できないわけですね。ちゃんとカリキュラムがあって教えるべきことが決まっていますので。そうすると、やはり自由に研究成果を還元できる場がほしい。しかも、それを、自分たち自身は柔軟な発想で研究しているため、ある意味ではリアルな場、現在進行形の場で、これを学生にも伝えたいというときには、この主題別Bというのは非常にすばらしい。しかも、別の学部の先生、あるいは外部の現場の方を呼んで一緒に語るということで、そこで得られる知的な刺激というのは、多大なものがあると思っています。その結果、私は本当にいろいろなものを得ることができたということで、お三方の話を聞いて、私も本当に共感できることばかりでした。

残念なことに、この授業が始まって15年ぐらいたちまして、この総合B、主題別Bの歴史を知らない先生方も大変増えてきていると。中島先生もおっしゃっていましたが。この主

題別Bの面白さ、楽しさを知らないで日々授業をされている先生が増えてきているということは、これは非常にもったいないことではないかなと思います。

ですから、きょうのこのシンポジウムをきっかけに、こういう面白さ、楽しさというものを、まずは我々の同僚の先生方に伝えていって、もう数年後には主題別Bの応募が殺到して選考しなければいけないというふうな苦労をチームリーダーにさせるという事態になれば素晴らしいなと思います。

皆様、本日は遅くまで出席していただきまして、どうもありがとうございました。

○小泉 では、きょうは本当にありがとうございました。これでシンポジウムを終了としたいと思います。ありがとうございました。